作品研究）『Fusion』学苑祭における教員の作品展示 2024 －Beauty style ～ファッションテイストと美容～－

(『Fusion』Gakuen Festival Teacher Works Exhibition 2024 - Beauty style ～Fashion taste and beauty～ -)

石川文子 [1)]

抄 録

2024 年 11 月 2 日に開催された本学の学苑祭＜山短祭 2024＞（テーマ「No Yamatan No Life」）の作品展示ブースにて、頭部ウィッグと首から下のマネキンを用いた全身作品を展示した。その展示作品について、制作過程やテーマを紹介する。

キーワード：美容技術　山野美容芸術短期大学　日本髪　日本文化　作品展示

I.　はじめに

2024 年 11 月に開催された＜山短祭 2024＞では、学苑祭テーマを「No Yamatan No Life」（山短を知らなければ今の私はない）として模擬店ブースや歌、バンドやダンス、学生ヘアショーなどのイベントを通して学生たちが協働し、「山短らしさ」を表すことを目的としている。その中の 1 つに作品展示ブースが企画され、各種コンテストに参加した学生や有志の教員が各々の作品を展示し、ご来場のみなさまに身近に美容や芸術の作品に触れあっていただく機会となるようなブースを設けた。

制作にあたり、学苑祭テーマにもある「山短を知らなければ」というところから、授業科目の「美容デザイン実習」のヘアスタイル、「メイク」「伝承美・着装」の授業で学ぶ各美容技術を取り入れ、「文化論」から学ぶファッションやヘアスタイルの中で、近世の西洋文化と伝統的な日本文化を融合させることを目指して制作した。

II. 作品紹介

作品タイトル『Fusion』は、「融合」を意味することから、日本の伝統的な日本髪と着物をベースとし、そこに北欧に多いブロンドヘアと西洋から伝わったヘアカラー、近世のファッションの特徴としてのアンダースカートを使用した裾の広がるシルエットを取り入れた。イメージカラーは、日本で高貴な色の一つとされる紫、相性のいい白やシルバー、差し色として橙色、朱色を使用した。

頭部ウィッグのヘアに関しては、脱色されているブロンドタイプをさらに脱色し、鬢（びん）以外に黄みを抑えるため根元に淡い紫色を入れ、毛先に向けて濃い紫色になっていくようにカラーリングし、鬢（たぼ）になる部分に紫色と橙色のライン状のカラーリングを入れ、アクセントとなるカラーを施した。

日本髪は前髪、左右の鬢、髱、髷（まげ）の 5 つのパーツからつくられる。元は中国の唐代の婦人のヘアスタイルをまねて結われるようになったことで、江戸時代までに日本独自の日本髪へと変化していった。

この日本の伝統的な日本髪の形を損なうことなく、髪色を明るくブロンドに近づけることで、ヘアスタイルでは融合を図った。また、日本人には黒髪が多く、古くは黒髪であることが美しいとされていたが、現代においてはヘアカラーが自分の好きな色、もしくはアイデンティティを表す色と捉えられる側面もある。現代性を持たせる意味でもブロンドヘアをベースとした。

髪型の作成については、「新日本髪」の手法を用いて、パサつきがちなブロンドヘアに艶が出るように、ワックスやグリース、スプレーを使用し、髱はややシャープに、鬢は横に張り出し、アクセントで入れた橙色と紫色のラインが鬢尻の流れと同様に出るようにした。髷は勝山髷や丸髷のように毛先から丸め込むようにつくり、根の後ろから見える部分を一部のカールした毛で洋装アップのときのように遊ばせるアレンジを入れた。また、前髪はやや大きめにつくり、鬢の張りとのバランスをとり、前髪をつくった毛先は根（髻）の左右から後ろに出す「振り分け」にすることで、遊びを出した。

メイクは、統一感を持たせるために瞳の色とアイシャドウに紫を用い、黒のアイラインで切れ長な印象にしつつも、白のラインやアイシャドウを足して、シャープな印象になりすぎないようにした。リップも衣装にある色味に近い色をマットな質感で用いた。

衣装は、白やシルバーグレーの地色に紫の花がポイントであしらわれている振袖をベースに、上には紗織の青紫の薄物を羽織り、下にはベースの振袖より紫や橙色、金が大胆にあしらわれている振袖を背面の腰から下に着つけた。腰から下には、黒のレース、紫や白の透ける素材の布でドレスのスカートのようにした

1)　ISHIKAWA Ayako
山野美容芸術短期大学
連絡先:〒192-0396 東京都八王子市鑓水 530

アンダースカートをはき、着物にはないボリュームのある足元のシルエットにすることで近世の西洋と日本の文化の「融合」を図った。また、近世のドレスではウエストラインが絞られているものも多いが、絞る代わりに帯のお太鼓部分をウェストマークとして使用して前から見たときの上下での切り替えのポイントとなるようにした。

今回、頭部ウィッグと首から下のマネキンは、別々のものを用いたため、つなぎ目がスムーズに接続できない部分があり、首元の装飾を足すことで目立たなくした。首の装飾にはパールやストーン、レースを用い、西洋のドレスにも合うようなデザインとし、日本の要素の多い上半身に西洋の要素を取り入れた。

本作品を考える過程は、現代のグローバルな社会となった日本が、古くから異国の文化を取り入れながら独自の文化をつくり上げている国民性と自国の文化や伝統を再認識する機会となった。ファッションやヘアスタイルはリバイバルしながら進化していく。その速度は昔よりも情報の伝達スピードが速い現代のほうが早まっているであろう。その中でも、過去を知り、理解を深めて次に活かすことは、新たなものをつくり出す上で重要であると考える。今後もこのような作品制作を通して、美容の普遍性と可能性を表現していきたい。

参考文献

1）石原哲男，日本髪の世界　ー髪型と髪飾りー．メディア設計（2000.11.20）
2）「文化論」教科書編纂委員会編　文化論．日本理容美容教育センター（2024.4）
3）山野美容芸術短期大学 https://www.yamano.ac.jp/

『Fusion』
山野美容芸術短期大学 学苑祭　2024 年 11 月 2 日
作品展示ブース 展示作品（写真は写真室にて撮影）